「心の教育」学習資料集

「京の子ども　明日へのとびら」が完成

◎京都の英知を結集して、京の子どもたちにおくる生き方応援メッセージ集「京の子ども　明日へのとびら」が完成しました。
平成19年度から府内各学校において活用することができるように、全小・中学生に配付します。

1　配 付 部 数　　約１１万５千部

京都市を除く、府内全小・中学校、盲・聾・養護学校小・中学部の児童生徒へ配付

2　作成の目的

道徳の時間をはじめ、すべての教育活動の中で、豊かな人間性をはぐくむ学習資料集としての活用を目指し作成

3　経　　過

平成１７年度から計６回作成検討委員会を開催し、内容や構成について協議

◇ 資料集の特色と構成

「心の教育」学習資料集「京の子ども 明日（あす）へのとびら」とは

京都の英知を結集して
京の子どもたちにおくる
生き方応援メッセージ集

一人一人が人間としての
よりよい生き方を見つめ、
子どもとともにみんなで学ぶ

「京の子ども 明日へのとびら」
名称に託する願い

◇ 人間として生きる基本を学ぶためのとびらを開ける
◇ 子どもたちが未来を肯定的にとらえ、志をもって歩む
◇ 京都の英知を結集し、日本へ世界へ向けて発信する

編集・活用のコンセプトは
“WARM”（ぬくもり）

①「英知（Wｉｓｄｏｍ）」
　→　人間の知恵から学ぶ
②「活力（Ａｃｔｉｖｉｔｙ）」
　→　学校・家庭・社会で生きる
③「共感（Ｒｅｓｐｏｎｓｅ）」
　→　心に響き、絆を結ぶ
④「京都（Ｍａｄｅ ｉｎ Ｋｙｏｔｏ）」
　→　京都らしさを大切にする

「京の子ども 明日へのとびら」の内容構成
～人間として、いつの時代であっても大切にしたい不易のテーマを資料化～

【学年発達段階に応じた４分冊構成】

４分冊 資料総数 ＜９６編＞		文化人・学識経験者等による書き下ろし文資料	児童生徒作文と執筆者からの応援メッセージ
小学校	低学年 編	１１ 編	１０ 編
	中学年 編	１４ 編	１０ 編
	高学年 編	１６ 編	１０ 編
中学校	編	１７ 編	８ 編

【府民ほっとメッセージ】
子どもたちの健やかな成長を励ます府民からのメッセージをスポット資料として掲載
＊「きみも身に付けよう、社会のマナーやルール」
＊「こんなすてきな子どもに出会いました」

【まえがき・あとがき】
各編につけた「とびらを開けて」「とびらの向こうへ」によってこの資料集で学ぶことの意義を確認

執筆者

小学校・低学年編

今江 祥智
内田 奈織
梅原　猛
江口 克彦
梶田 真章
河合 雅雄
久木 久代
澤田 ふじ子
瀬尾 まいこ
武田 美保
永田 和宏
永田　萠
中西　進
西本 吉生
畠中 光享
日野原 重明
松尾 心空
山折 哲雄
山本 兼一

小学校・中学年編

石川 九楊
岡田 節人
梶田 真章
河合 雅雄
河野 昭一
久木 久代
佐渡　裕
武田 美保
坪内 稔典
徳川 輝尚
西本 吉生
日高 敏隆
本庶　佑
松尾 心空
村井 康彦
山本 兼一
鷲田 清一

小学校・高学年編

安藤 仁介
伊藤 謙介
上田 正昭
梶田 真章
河合 雅雄
木田 安彦
衣笠 祥雄
久木 久代
小寺 正一
崔　善今
澤田　淳
茂山 千三郎
志村 ふくみ
鈴木 俊哉
千　玄室
坪内 稔典
徳川 輝尚
ドナルド=キーン
中西　進
西本 吉生
日高 敏隆
松尾 心空
山折 哲雄
山本 兼一

中学校編

伊藤 謙介
稲盛 和夫
上田 正昭
梅原　猛
梶田 真章
河合 雅雄
久木 久代
小寺 正一
澤田　淳
千　玄室
龍村　仁
曺　承鉉
徳川 輝尚
中西　進
中村 桂子
西島 安則
平田 眞貴子
廣瀬 量平
向山 ひろ子
村田 純一
山折 哲雄

（敬称略　50 音順）

このリーフレットは再生紙を使用しています

「心の教育」学習資料集

京の子ども 明日へのとびら

きょうの こども あすへの とびら

京都の英知を結集して
京の子どもたちにおくる
生き方応援メッセージ集

京都府教育委員会

人間の知恵から学ぶ
WISDOM
英 知

京都らしさを大切にする
MADE IN KYOTO
京 都

キーワードは
WARM
ぬくもり

学校・家庭・社会で生きる
ACTIVITY
活 力

心に響き、きずなを結ぶ
RESPONSE
共 感

人間としての心のぬくもりをはぐくむ

人としての
あるべき姿

かけがえのない命、
生と死の重さ

郷土や国の
発展を願う心

6つのテーマを
自分のハートで
考える!!

人を思いやる心、
人とのつながり

この世に生きること
の意味、素晴らしさ

自分のはぐくみ、
責任ある行動

人間としてよりよく生きるために
・自分を見つめ　・他人とのかかわり
・自然や崇高なものとのかかわり　・集団や社会とのかかわり
について、上記の6つのテーマで学び合う

「京の子ども 明日へのとびら」とは

人間として、しあわせに生きていくために、どうすればいいかを考えるための学習資料集です。
京都府の子どもたちが人間としてよりよく生きるための基本について学びながら、一人一人に豊かな心がはぐくまれることを願って作成したものです。

京都にゆかりのある文化人等の「特別書き下ろし文」資料

京の子どもの健やかな成長を励ます
「府民ほっとメッセージ」（スポット資料）
◇きみも身につけよう、社会のマナーやルール
◇こんなすてきな子どもに出会いました

執筆者からの
応援メッセージ付き
「児童生徒作文」資料

京都にゆかりのある文化人や学識経験者等、
各界、各分野で御活躍の皆様による、
50編を超える子ども向け書き下ろし文を中心に

小学校3編 中学校1編 の4分冊作成

1 あなたへのおくりもの

永田 萌

ことばは いいね
きみの ことが わかる
ぼくの ことを
わかって もらえる
ことばは いいね
ぼくらを しあわせに
して くれる

たいせつな
ことば
たいせつに
つかおうね

本文は次ページに続く

小学校・低学年編（例）

2 いのちの尊さを自覚しましょう

上田 正昭

人間はとかく自分の力だけで生きていると思いがちですが、自分一人の力でのみ生きているのではありません。だれでも親があり友達があり、町や村の人々のなかで生きています。そして世の中にはたくさんの動物や植物が存在しており、人間は人間どうしばかりでなく、自然のなかで生きています。人間は空気を吸わずに生きることも、水を飲まずに生きることもできません。人間は自然によって生かされてきたといっても過言ではないでしょう。

ところが、人間は人間こそいちばんえらい存在だとうぬぼれるようになり、人間は一人だけでも生きることができると錯覚するようになりました。古代でも中世でも、人間は自然の力をあがめ、自然の力をおそれつつしみ、自然と調和して暮らしを営んできましたが、近世さらに近代や現代に入りますと、自然をおそれずに自然を破壊し、地球を汚染してきました。

「人」という文字を見ても、ななめの画がたがいに支え合っています。助け合って自然と共に生きることがたいせつです。他人の痛みを感じることのできる人間、やさしさといたわりの感性をもつ人間になることが、人間が人間らしく生きることにつながります。こうした感性は訓練しなければ身につけることはできません。

生きているものには必ず死があります。死によっていのちは絶たれます。いのちの尊さとは、死をしっかりとみつめることによって実感することができます。いのちは生きることのすべての基礎となります。

戦争は、あらゆるいのちをうばう最悪の行為です。

本文は次ページに続く

小学校・高学年編（例）

小学校・中学年編（例）

12 ねこはどこまでわがままか ―― 人はどこまで動物か ――

日高 敏隆

ぼくの家には、もう三十年以上昔から、いつもねこがいました。

もちろん同じ一びきのねこがずっといたというわけではありません。新しいねこと入れかわりながらだったのですが、ねこがいないという時期はありませんでした。今も二ひきのおすねこがいます。

こんなに長い間ねこといっしょにいると、「ねこってほんとうにわがままだな。」と思うことがよくあります。

「おいで！」とよんでもぜったいに来てくれません。ところが、とつぜん何を思ったか、ぼくが読んでいる新聞の上にやって来てすわりこんでしまったりします。そういうときは、

「どいて！」と言ってもぜったいにどこうとはしません。

自分のしたいことばっかりしていて、人の言うことなんか聞かないのです。犬だったら、かい主の命令にすぐしたがうのに……。

どうしてねこは、こんなにわがままなのでしょう？

それは、ねこがむれをつくって生きる動物ではないからです。

犬はそのせんのオオカミと同じく、何びきかでむれになってくらす動物です。むれの中の犬たちは、自分たちのリーダーにちゃんとしたがい、自分勝手なことはしません。そうしないと、むれから追い出されてしまうからです。

犬はもともとそういう生き方をしてきた動物なので、人間にかわれるようになってからも、かい主を自分のリーダーだと思っているのです。だからちゃんとかい主の言うことを聞くのです。

本文は次ページに続く

中学校編（例）

16 一期一会の教え ―― 平和への祈りを深める ――

千玄室

皆さんは、二十一世紀後半に、果たして日本の姿はどうなっているだろうか、と想像したことがありますか。

わたしは、政治、経済、文化という根本的な問題から考えると、このまま調子で進んだならば、日本がふと振り返ったとき、世界中でただ一国取り残されているのではないかと思うことがあります。

太平洋戦争後、アメリカ社会を豊かな社会の目標として進んできた我が国は、経済発展で世界中が目を見張るほどの成長を遂げた反面、人心の荒廃と精神的な空洞化において世界においても注目され、外国の要人から「かつて日本という国があった。」といわれるような、日本社会に対する見方もあるほどです。

我が子でさえも育てられない親や基本的な善悪の判断を見失った行動を繰り返す若者たちを見ていると、戦後五十年の教育のひずみがそのまま表面に吹き上がってきたと思わざるを得ません。五十年の間にひずんだ社会を立て直すには、それ以上に相当の時間がかかると思われます。

しかし、何年かかろうと、日本の皆さんに強く願うことは、温かい人間関係が息づく社会（世の中）をつくる努力を惜しまないということです。

自分が少しでも人よりも優位に立ち、一番を目指すような社会ではなく、これからは「一人一人の人間が「ONLY ONE」（かけがえのない自分）として、みんなの中で生かされる世の中こそが実現されなければならないと思います。

わたしは、かつて海軍特別攻撃隊の一員として戦争を体験しましたが、そのとき、戦場に散華した尊い犠牲者の姿は、いささかも色あせることなく、今もなお、わたしの胸の内にはっきりと焼きついています。そして、それがわたしの提唱する「茶からピースフルネスを」の理念の精神的支柱となっているのです。

昭和二十年（一九四五年）五月、沖縄攻撃が激しくなったときに、わたしは鹿島灘の航空隊に在隊していました。その際にいっしょに飛行機に乗っていたのが、先年亡くなりましたテレビ番組の「水戸黄門」で活躍した俳優の西村晃さんです。いつも共に飛行機に乗って、厳しい訓練を受けました。

それ以前の四月からは、いよいよ出撃命令が下りそうな緊迫した状況でした。そのときは皆で、いっしょに死のうと約束しました。ある日、飛行作業が終わってから、わたしは携帯用の茶籠を持参していたので五、六人の仲間といっしょに飛行服を着たままでお茶会をしました。飛行機のかたわらで車座になって、お茶を一服飲んだのです。

そして、仲間の一人が「千な、俺が生きて帰ったら貴様のところの茶室で茶を飲ませてくれるか。門前払いするなよ。」と言いました。わたしは、その言葉がぐさっと胸に刺さりました。出撃したら、生きては帰

△沖縄・奄美大島・鹿児島交流茶会、和合の茶会（平成18年）

本文は次ページに続く